

富士山麓病院介護医療院新聞 第178号

富士山麓クリニック



雪だるまがやってきた！

《症例検討・125》

『優しい人』のいる『家』

院長 清水 允熙

私たちには『優しい人』のもとへ行こうとする根強い潜在意識があるようです。このことは、認知症に陥ったお年寄りの、認知症の或る時期の言動に接すれば誰もが気付くことです。

では、この場合の『優しい人』とはどのような人かという点、それはお年寄りが若いころから抱いていた願い・期待・計画・夢などを叶えてくれる人、つまりお年寄りの『自己実現』に協力してくれる人であり、また、お年寄りの『存在価値』を認め、お年寄りに尊敬・感謝の念を持って接してくれる人です。

そして、このような行為が道徳心や義務感からではなく、お年寄りの『いのちの存在』への感謝により行われる人のようです。

私たちの病院での臨床経験からは、このような『優しい人』がないお年寄りは、本当なら九十歳ぐらまでは認知症を避けることができる体質と幸運を持つているにもかかわらず、八十歳過ぎごろには認知症に陥ってしまったている、つまり『知的天寿』を全うしないで、時期を早めて認知症に陥ってしまったということができません。ただしこれは「トシだから仕方がない」「CT検査の結果ではトシ相応の変化が認められる」「認知症は治らない」などと言われているお年寄りの経験です。

ところで、以上のような『優しい人』について更に検

討すると、次のようなことがわかります。それは『淋しい・悲しい・つらい・つまらない・することがない・することは毎日同じことばかり』などの生活、つまり『優しい人』のいないことが原因となる生活はお年寄りの知的能力を低下させ、認知症に陥る時期を早めてしまうということです。このような環境では脳神経細胞の働きが弱められるからなのでしょう。

「家へ帰る！」

以上のような考え方を裏付けるような例を次に紹介しましょう。

(例一)

Aさん（七十八歳、女性）

Aさんは物忘れが多い。夜中に起きていて、部屋をゴソゴソしている。見ると荷造り

をしている。「何をしているの」と聞くと「家へ帰る」と言う。「ここが家ですよ」と言ってもわからない。夜が明けると外へ出て行こうとする。自分が生まれた実家へ帰るつもりらしい。実家は現在もうなくなっている筈なので、外出を止めようとすると、興奮して大騒ぎになる。

(例二)

Bさん（八十一歳、女性）

炊事・洗濯などできなくなっている。息子に「おまえ、家に帰ろうよ」と言う。「ここが家だよ、母さん」と息子がいくら説明しても不機嫌になるだけ。「いや、違う」と言うて納得もしない。手荷物をつくって、家を出て行ってしまふ。夜中でも何処かへ行こうとするので困っている。「目的地がハッキリしないので走

りまわった」とタクシーの運転手に言われ、数万円も請求されたことがある。

優しい人のいる「家」へ

以上の二例です。認知症の中期の状態です。

まず、Aさんの場合を説明しましょう。

Aさんの老後の日々は、Aさんが若いころに願っていた日々とはとても異なっていました。Aさんは若いころから、老後に子供たちや孫たちと、皆で仲良く、楽しく過ごす日々を願っていました。しかし、老後の現実はいろいろな理由で期待したような生活にはなりませんでした。Aさんは孤独でとても淋しい生活を続けていたのです。

このようなAさんの願いに反する生活は、Aさんをどんどん認知症へ導いていきました。こ

のような場合、Aさんを認知症から救い出せるのは、Aさんの昔からの願いを実現させることのできる『優しい人』以外にはいけません。しかし、Aさんの周囲には『優しい人』はいなかったようです。現状からの救いを必要とするAさんは、とうとう『優しい人』を自分で見つけ

出しました。『優しい人』はAさんが生まれ育った昔の家に居たのです。父母や祖父母、兄妹たちです。その『家』では皆がまだ幼いAさんに『優しい人』でした。やがてAさんは『優しい人』の居ないところは『家』とは思えなくなりました。さらに認知症の状態がAさんを後押ししました。両親たちが亡くなっていることは、Aさんの都合で記憶の外へ消えました。Aさんは「家へ帰ろう」と思いました。したがって、今住んでい

る所を出て、昔の『家』へ帰宅しようとする、道に迷った子供になつていたのでした。

★特に長男が『優しい人』でない場合、母親（姑）は「嫁がお金を盗った」と言うことが多いのです。

次にBさんの場合です。Bさんも大筋ではAさんと同様です。しかし『家』には違いがあります。Bさんは自分のことを放りっぱなしにしている子供たちを思うと「あんなに苦労して育てたのに」と悲しくなりました。Bさんは自分を信頼し、尊敬してくれたころのま

だ幼かった子供たち、何かにつけ「お母さん、ありがとう」と感謝してくれた子供たちのごとを思い出すようになりました。Bさんは子供たちに自分がどううしても必要な存在だったころ、

太陽と同じくらいに『存在価値』が自分にあつたころの生活を思い出していました。

やがてBさんはそのころの子供たちが自分を待っていると思うようになりました。「早く帰ろう」とBさんは決心しました。Bさんにとって自分の『存在価値』を認めてくれる子供たち

の居るところだけが『家』になったのです。

★Bさんと同様の理由で『自分の横に布団を敷いて、子供を寝かしつける』や『人形を持ち歩く』などの行為が出現することがあります。

つまり「人生終わり良ければすべてよし」をAさん、Bさんに実現させてあげようとお子さんたちと試みたのです。ただそれだけのことでした。

生活史を調べて…

Aさん、Bさんの場合はご家族の理解と協力が得られ、元気になられて退院されました。私たちのしたことはA、Bお二人の生活史を調べたこ



新年度の展望

事務長 牧ヶ谷 泰洋



春の訪れを感じる季節となりました。皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

現在、ご家族の皆様には面会の中止について、多大なご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。おかげさまで感染症の流行を招くことなく運営を続けております。

利用者様の健康とご家族様の安心を第一に考え、施設職員は日々、感染防止に努めております。引き続きご理解、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

さて、2026年の介護業

界は、加速する人材不足に直面しております。全国で240万人の介護従事者が必要とされるなかで、当施設も昨年より外国人人材の受け入れを開始しました。現在、フィリピンからの介護実習生を2名、受け入れております。

認知症対応力の優れた職員採用及び教育は、清水理事長が掲げる『優しい人』の理念に基づき実践されており、当施設職員がめざすべき姿です。今後も人材育成と職員の対応力向上を図ってまいります。

現在、介護業界ではテクノロジー導入による生産性向上が求められており、当施設では介護ソフトを導入することとなりました。今回の介護機器の導入は一つの大きな転換点になっていくものと言えます

職員一人一人が利用者の皆

様への対応する時間を増やすことで当施設の強みである『優しい人』の実践をより良いもの、深いものにしていければと期待しています。

また、今年の大きな計画としては、利用者の皆様がお過ごしになっている新棟（療養棟）の防音工事に着手する予定です。当施設近隣の環境音に配慮するため、国の補助金を活用した大規模な防音工事を行います。全室の窓を防音仕様に交換して、利用者の皆様が快適にお過ごしただけできるよう、取り組んでまいります。工事期間中は利用者の皆様及び、ご家族の皆様にもご迷惑をお掛けいたしますが、生活環境の改善を図るためのものです。安全には細心の注意を払ってまいりますので、

ご理解いただきたくお願い申し上げます。

団塊の世代がすべて75歳以上になった「2025年問題」直後の今年2026年は今後の介護業界にとって大きな転換期となっていく年となります。深刻な人材不足は、介護施設の運営にも大きく影響を与えます。働きやすい職場環境を整えていくことにより、当施設の優秀な人材確保につなげ、利用者の皆様に安心してお過ごしただけできるよう、職員一同力を合わせて取り組んでまいります。

今後とも当施設の運営にご理解、ご協力をいただけますようお願い申し上げます。

2026年が皆様にとって素晴らしい一年になりますよう、お祈り申し上げます。

パステルカラー

のような人生観

看護部長 藪崎 元浩

私はパステルカラーが大好きです。明瞭な色彩ではなくすべての色に白が混ざった優しさに包まれた色彩が心を和ませるからです。



藪崎看護部長

人は生きていくうえで、どうしても自分自身が経験してきた尺度で、白、黒をつけたくなる習性があります。誰しもが持つてしまっている悲し性さみかと感ずります。

あっ!? 申し遅れました。

わたくしは、昨年の10月より当施設の看護部長を拝命しました藪崎やぶさき元浩もとひろと申します。

私の歴史をここで軽く述べたいと思います。私は幼少期の頃オマセサンで小学校の時から人の心に非常に関心がありたいと考えておりました。

高校で進学を考えたときは、国語の教員か心理士のどちらになろうか迷うほどでした。その時、知人の兄や同級生が精神的に社会に適応できなくなり大きき悲しみを感じまし

た。その時、心が疲弊し、幻覚妄想が出現して苦しんで治療を進めている人に対して、微力でも支えになりたいと考え心理士の道を選択しました。

そして心理士として精神科病院へ入職して心を病んでしまっている方々の精神鑑定や心理検査の業務に携わることとなりました。3年経った時に、病院の理事より看護学校に行ってみてはどうというアドバイスをいただき、女性に扮して看護学校へ：(笑)というわけではなく、ただ、その頃の看護の世界はジェンダーで大きな弊害もありました。しかし、何とか男性として進学をすることができました。その時もかなり悩み、一度は医療関係から退こうとも考えました。私は文章で物事を表現することが好きだったこともあり新聞記者も考えました。その時、面接をしてくださった人事部長さんが「な

ぜ、今の職業を辞めようと思うのか？ 私の息子が君だったら、私は息子のことを誇りに思える。そんな仕事についているんだよ。君自身もまだ迷っているのだと感ずる。もう一度考えてらっしゃい。それでもこの職業を選択したいのならもう一度来てみなさい」と言っていたきました。そして、自身がなぜ心理士になりたかったのか、初心に戻るきっかけをいただきました。また、関わらせていただいた患者さんから「辞めないでほしいけど、もし辞めたとしても藪崎さんは人としてもっと大きくなつて私たちを救いに来てくれるんだよね。信じて」と言われたことを思い出す時間ともなりました。

そのようなことを振り返りますと、私ひとりでは生きてこれなかつた自分がそこにあり、たくさんの人に支えら

れて生きてきた自分に気づくこととなりました。白、黒という自我の概念ではなく、周囲の皆さんからたくさんさんの優しい色を付けてもらいました。私はその時淡い色というアドバイスをたくさん受け取らせていただき、パステルカラーな自分でありたいと考えるようになりました。これからも柔らかさ、優しさ、爽やかさ、清潔感を意識した人生観で過ごしていきたいと思っています。

そのためには、心のゆとりを持ち、切羽詰まった時こそ皆さんからいただいたパステルカラーを大切に柔軟な思考と共に邁進して参りたいと考えております。

優しさにあふれるパステルカラーに包まれた世界で唯一無二の施設となれるようにワンチームで進んで参ります。

時の流れに

身を任せて

CACチーム 栗原 千ヨ

今から35年前、一枚の紙に目が止まり、よく読んでみたら「御殿場高原病院」で看護助手を募集しているという内容だった。

自分には何の資格もないが働きたいと思い、家族に相談した。家族は「病院は資格がないとつまらないよ。千ヨには勤まらない！」と、反対された。

義母は保健師で室長までやってこられた方なので、千ヨには勤まらないと思ったのかもしれない。私としては長男の嫁として老いていく義母のお世話をしたい。いろいろ学びたいと反対を押し切った。しかし、反対を押し切って就職することは不安でいっぱいだった。

研修の中でクレゾールの臭いが染みついて、当時はお店で並んでいると看護師さんですか？と聞かれることもあった。看護助手として処置に付き添ったが、褥瘡がひどく骨がむき出しになっている所を、セツシでコンコン叩きながら「すごいなあ！」「しっかり抑えて！泣いている場合じゃないよ！」と、初めて褥瘡の壊死組織を見たときは驚きと悲しみが溢れたこともある。それでも看護師の助手として先輩の動きをチェックし、食いついていった。

しかし、慣れてきた3カ月に薬局のメッセンジャーとして異動と言われる。仲間からは惜しいが仕方がない。頑張つて！と応援された。薬局の中には薬局長と高齢の薬剤師さんがいた。右も左も薬剤、治療材料が沢山並んでいるのを見て不安がいっぱいになった。夜も眠れないくらいだった。業務命令だから辞め

るか働くかを決めるのは自分だ。よく考えて「やるしかない」と決断した。薬局長（女性）が優しく教え方が上手い。薬品名より先に容器、薬の形色を覚えてくれた。昼休みは薬品名と効能の書き込みを必死で努力をした。きつかけがあつて環境に染まっていた。高齢の薬剤師さんが「僕の免許をあげたいよ！」と冗談を言ってくれた。

そして20年近く経ったところに事務所の女性のリーダーになつて貰いたいと異動を命じられた。業務命令として素直に受けた。事務所の中には独身女性がいて、自分の娘と変わらない年齢だった。中には休んだり遅刻をしたりと雰囲気壊す者がいた。どのよう

に注意をすればいいのか悩み、別室に呼んで事柄だけを注意し、私的なことには触れないように持つていった。自分の気持ちを手紙にして持つてきてとお願いすると、素直に書

いてくれた。女性の職員に自分の受け持っている仕事の内容を書き出し、提出をお願いした。皆さんとても優秀だった。仕事の内容を知ることでも声掛けがしやすくなり、雰囲気も良くなった。

そんな中、今度は清水理事長先生、秘書の松下さん（現在は常務理事）から、中国に患者さんがいるため、理学療法士の池ノ谷さんと二人で対応に行つて欲しいと依頼があった。患者さんのケース記録を読むと幻覚・幻視があり、歩行不安定とのことだった。

池ノ谷さんと約半年間、中国との往来で対応を続けた。理事長と松下秘書は中国へ様子を見に来てくれた。不安がいつぱいだった私たちも二人が来てくれることを患者さんと一緒に首を長くして待っていた。患者さんはどんどん元気がになり、中国共産党の毛沢東時代の話などを教えてくれた。通訳の方は朝8時から18

時まで居てくれたが、帰った後は何とか身振り手振りでごす。それが終わると二人で一日の反省会をする。日本に戻ると報告書の提出がある。

その繰り返し半年間だった。そろそろ退職かと考えていたところに、新しい仕事を立ち上げるからと誘いがあり、そちらに移つて現在にいたつての認知症ケア研究室（CACチーム）のことだ。

地域連携室のケースワーカーがケース記録を作成し、それにしっかり目を通し、外来所受けに同席し対応に入る。私たちの上司は、見た目は女っぽく見えるが男勝りの上司だ。「一緒にの船に乗っているから沈むときは必ず一緒に」と、仕事からプライベートの話までなんでも話してくれる。ついつい聞き入ってしまうこともある。

淡々と文章にしてきたが、ここまでの道のりには大変な

ストレスもあったし、常に勉強だった。

夫からいい本を見つけた！と渡されたのは『安らぎの処方箋』だった。精神科医の斎藤茂太博士の本で、ストレスを溜めないためにガス抜きをすることが大切だと説いている。

この本のお陰で心身が丈夫になったと思う。今は素敵な上司と仲間と働けることに感謝しかない。

利用者様の作品



2階療養棟の作品

今年に入ってから、当施設の近隣でも大雪が降りました。久しぶりの銀世界です。

そんななか、利用者みなさまが梅の木の作品を作ってくれました。小さくちぎった折り紙を、一枚一枚丁寧に張り合わせていきます。

どうか無事にあなたかな春が迎えられますようにと願いを込めながら…



一人ひとりに 寄り添うケアを 目指して

看護師 山下 智加

令和七年五月に入職し、春の訪れとともにもう少しで一年になるうとしています。夫の転勤に合わせて、山形から御殿場に引っ越してきました。富士山の麓は、雪はないものの東北とはまた違った寒さで驚きました。

プライベートでは中学生と三歳児の母をしていますので、家族ともども体調管理に苦戦しているところです。愛犬のチワワも冬毛が例年以上に密になっています。

前職は助産師として産科のクリニックに勤めていました。高齢者施設での勤務は初めてです。看護学生の頃に学んだ老年看護学の記憶を思い起こし、経験豊富な看護・介護の諸先輩方にご指導を頂きなが

ら日々お仕事をさせて頂いております。

利用者様との関わりには、たくさん学びがあります。それぞれの利用者様によって安心・安楽の形が違うので、同じやり方は通用せず応用力が必要だと感じています。

認知症の各症状への対応や看取りのケアについても、まだまだ勉強不足ですので、ますます精進していきたいと思っています。

最近の利用者様との関わりの中から一つエピソードを紹介させていただきます。と思います。

ある九十年代女性の利用者様は、夕方になると「お母さーん」と大きな声を出してお母さんを探しに廊下を徘徊します。車イスを使用している方なので、車イスからの転倒や事故がないようにそばで見守りをします。ただ見ているのではなくお声がけをして、「なぜお母さんを探している

のか」を聞いたり「お母さんはどんな服を着ているのか」などを聞いて一緒に探す手伝いをしたりします。日によって同じ答えの時もあれば、違う答えをおっしゃることもあります。とある日のこの方の答えは「お米を研いだ時の水加減が分からなくなったからお母さんに聞かなくちゃ」とのことでした。「お釜の底から中指の第二関節まで」と教わったような気がするが自信がないと言うのです。

九十年代の方なので戦争経験世代ですし、当時の家庭は家長制で家事は女の仕事だったとも推察されます。お母さんを探している時のご本人の年齢が何歳頃なのかは教えてもらえていないので分かりませんが、お母さんからお米を研ぐ仕事を任せられるような年頃なのではないかなと想像しています。

ご本人様とお母さんとの関係性や暮らしぶりが垣間見えるようで、どんな人生を歩ま

れてきたのかを考えるきっかけになりました。

利用者様のひととなりがかつてくると「その人らしく生活する」ことを少しでも理解することができ、援助の方向性をどのように考えるのかなのかが見えてくるのではないかと考えています。

それぞれの利用者様と信頼関係を少しでも深めて、その場に応じて適切な援助ができるようになりたいです。施設内で過ごす利用者様の日々を少しでもよいものにできるよう努めていきたいです。



介護のつらさ

介護職員 勝亦 啓文

私は昨年、介護福祉士を養成する専門学校を卒業して、四月に入職したばかりの新人です。と書くと、若い新人を想像されるかもしれませんが、知命を超えた、白髪交じりの新人なのです。

もともと御殿場生まれの御殿場育ちですが、高校を卒業した後は神奈川の相模原で三十年ほど暮らしながら、横浜にある学校で教員をしておりました。四〇代中頃、日ごろの不摂生がたたり、CPAP（注）シーパップ 睡眠時無呼吸症候群の治療）と高血圧治療薬の処方のために、それまで無縁だった病院に月イチで通院するようになったときに、自身の今後と御殿場の実家で暮らす高齢の祖母、両親が気がかりとなって、帰ろう

かと考えました。

さて、戻るとしてもその後はどうしようと思案するなかで、曾祖父母を自宅で看取った経験や妹夫婦が長く介護業界にいたこともあって、介護の仕事に就いてみたいと思うようになったのです。

そこで五十歳を迎えるのを機に勤めていた学校を退職し、介護福祉士を養成する公共職業訓練として専門学校に通わせていただきました。その二年間で、介護にかかわる制度や技術だけでなく、「こころとからだのしくみ」、「医療的ケア」といったそれまで学んだことのない領域を勉強させていただき、有料老人ホーム、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設にそれぞれ一か月間の実習に行かせていただきました。この経験を通じて認知症の方のケアに携わりたいという思いを強く抱くようになったところ、幸い富士山麓病院に拾っていただきました

ました。

入職当初は右も左もわからずにあたふたするばかりでしたが、今では先輩スタッフの温かい指導と励ましのおかげで、落ち着いて仕事ができるようになったかなと感じています。

そんな私には強く心に残る、ひとつの思い出があります。入職二カ月目、まだこの仕事に慣れていなかった日の夕方、ある利用者様のトイレの介助をさせていただいたときのことでです。

利用者様の横で介助のためにしゃがみこんだとき、その方がにつこりとしながら、私の頭を何度もなでてくださいました。もしかすると、そのときの私は疲れた顔をしていたのかもしれませんが。頭に触れた手のぬくもりに、介護は私が一方的に提供するものではないことを実感しました。この方だけでなく、利用者様はちよつとしたお手伝いに

「ありがとう」とおっしゃってくださいます。一方の私はというと、介助にかかわる技能だけではなく、利用者様の本当のお気持ちを汲み取る能力や姿勢もまだまだだなあと自覚する場面が多々あります。そんな私に利用者様が「ありがとう」とおっしゃってくださいるのは、私の頭をなでてくださいました利用者様のようには、あなたはまだ下手だけど、頑張つてね」と、子供を励ますようなお気持ちでいらっしやるからだろうと推測しています。

介護医療院は多くの利用者様にとって日々の生活の場そのものです。今、私は利用者様の日常生活の中で利用者様に支えていただきながら「しごと」をしています。利用者様から本当の意味の「ありがとう」をいただけるように、介護にかかわる技術と知見を高めていかなければと思う日々です。

レクリエーション フォトギャラリー



クリスマスにケーキバイキング!



屋上の山麓神社で初詣



スタッフが鬼になりきってくれました!



有志の職員でコンサートを開催しました



ラーメンさんろく亭のお味はいかが?



お気楽
歴史
エッセイ

⑥

歌は世につれ

内藤 真治

♪宮さん宮さん お馬の前に
ひらひらするのは何じやいな
トコトンヤレ トンヤレナ
あれは朝敵 征伐せよとの
錦の御旗じゃ知らないか
トコトンヤレ トンヤレナ

この詞は日本最初の軍歌、
行進曲「トコトンヤレ節」です。
1868（慶応4・明治
元）年、作詞は品川弥二郎、作
曲は大村益次郎（ともに長州
藩士）説ですが確証はありま
せん。

俗謡風の曲で大いに流行っ
たようです。ところがこの歌、
みんなで声を揃えて、とはい
かない「分断」の歌なのです。
朝敵（天皇に敵対する悪い奴）
を征伐せよとありますが、二

番には「帝王（みかど）に手向
いする奴を…どんどん撃ち出
す薩長土」とある内戦（158
年前の戊辰戦争）の歌でした。
宮さんとは東海道を東へ進む
征東軍総督有栖川宮熾仁親王
のこと。天皇を担いだ薩摩（鹿

児島）長州（山口）土佐（高知）
が「官軍」なら、幕府（徳川）に
忠誠を尽くした側は「賊軍」に
なります。

しかしこれはあくまで勝者
の側から見た歴史観、白虎隊
の悲劇などで知られる会津へ
行けば資料館には薩長の軍勢
を官軍とは言わず「西軍」と表
現しています。明治以後の東
北地方は薩長中心の政府にい
じめられました。それはとも
かく。

維新以後は「脱亞入欧」の一
本道。音楽の先生でピアノが
弾けない人はいませんが、三
味線や琵琶は？ とにかく音
楽と言えば洋楽になりました。

明治期の歌には外国で歌わ
れている歌に日本人が詞を付
けたものがたくさんあります。
「ちようちよう ちようちよ
う 葉の葉にとまれ…」（蝶々）

はスペイン民謡、「夕空晴れ
て秋風吹き…」（故郷の空）は
スコットランド民謡、「埴生
の宿」はイギリス人ビショッ
プ、今も「むすんでひらいて
…」と歌っているのはフラン
スの哲学者ルソーの作曲です。
私たちの世代が歌った歌の
歌詞も難しい？ものでした。

「うさぎ追いし かの山…」
（故郷）を、「うさぎの肉は
おいしい」と思っていた子は
たくさんいたでしょうし、「夕
焼け小焼けの赤とんぼ 負わ
れて見たのはいつの日か」（三
木露風詞 赤蜻蛉）の「負われ

て」を「背負われて」（上州で
は「おぶさって」ではなく）追
いかけられて」と理解した人
が多かったのではないでしょ
うか。

「赤い靴はいてた女の子 異
人さんに連れられて 行っ
ちゃった」（野口雨情詞 赤
い靴）も田舎の子は「異人さ
ん」なんて見たことがないか
ら、「いい爺さん」がなんで「人
さらい」みたいなことをする
のか不思議に思ったものです。

中学生になっても難しかつ
たのは「箱根八里」（鳥居枕
詞 滝廉太郎曲）です。ハコ
ネノヤマハテンカノケン カ
ンコクカンモモノナラズ：
はまだしも…ヨーチヨーノ
シヨーケイハ…となるともう
いけません。
だれもが意味もわからぬま
まに、大声を張り上げて歌っ
ていました。



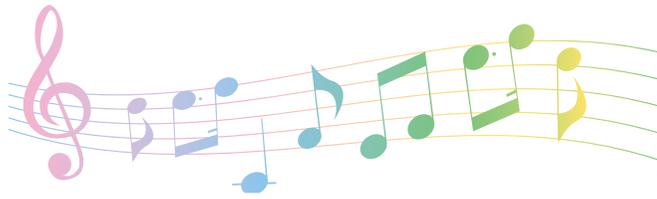
勧められて、ハマって

リハビリ(理学療法士)

中本 大樹

4、5年前に奥さんに勧められてSixTONES(ストーンズ)のファンクラブに入った。

自分から強く興味を持ったわけではなく「まあ一度くらいは」という気持ちだった。



アイドルの音楽は、どこか自分とは縁がないものと思っていた。

ところが、実際に聞いてみると、その印象はあっさり覆された。耳に残ったのは、軽やかさよりもロック色の強いサウンドだった。歪んだギターといったバンドサウンド・リズムに、中高生の頃からロックバンドを聞いていた自分の感覚が、自然と反応した。

勢いで押すのではなく、感情の揺れや奥行きまで感じさせる音楽。同じ曲でも聴くたびに違う表情が見えてくるのが面白い。気づけば、自分からSixTONESの曲を選んでる。

始まりは「勧められて」だったが、今はすっかり「ハマって」いる。音楽との出会いは、案外こんな風に訪れるものなのかもしれない。

編集後記

「天地無私 春又帰」とか。「三寒四温」という言葉も思い出されて、春は何やらうきうきした気分にもなるうきうきものです。

それにしても自然は不公平、北国では大変な大雪で人々は除雪に難渋したというのに、太平洋側のダムは水不足の心配でした。

今号では事務長から介護業界の現状、かかえる問題点と合わせて、利用者様に快適な生活環境を、と施設の改善の一端について報告してもらいました。

職員からはベテランも新人もみな同様に、清水理事長が願う「優しい人」の体現に向けて日夜努力しているさまが語られ、頼もしい限りです。

(内藤 真治)

